

みなさん、こんにちは！以前、小児科の当直をしていたとき、「こんなことで夜間に連れてきてしまってすみません」と何度も謝るお母さんがいました。私は、「心配するのが親の仕事。大丈夫かどうかを判断するのが私たちの仕事。遠慮なく連れてきて」とお伝えしました。約10年後、そのお母さんに偶然再会し、「あのときの先生の言葉に本当に救われました。子どもは今、元気に小学校へ通っています」と笑顔で話してくださいました10年たつても、その言葉を覚えていてくださったのです。子どもに対しても同じかもしれませんね。「悩むのが子どもの仕事。話を聞くのが大人の仕事。」そんな安心できる一言が、子どものこころのドアを開ける鍵になるのかもしれないね。



☆読み手☆

鈴木 裕美（すずき ひろみ）
香川大学医学部 小児科専門医

72

こころのドアを
開けるのは
聴いてほしいことが
あるときです（子）

71

こころのドアを
開けてください
お話したいことが
あるのです（親）

今月のかるた解説

思春期前の子どものこころのドアは、大きく開いています。「見て！」「聞いて！」と無邪気に親を呼びます。ところが思春期になると、こころのドアは閉まり、ドアのノブは子ども側にしかついていません。ドアを開けるかどうかは、子どもが決めるのです。親は話したいこと、聞きたいこと、伝えたいことが山ほどあります。でも、少し開いたドアから次々と言葉を投げ込み、閉めようとしたドアに足を挟んで連射し続けると、「もう開けたくない」と思われてしまうかもしれません。

思春期だった私の3人の子どもたちも同じでした。私は自分の都合でドアをこじ開けようと必死でした。でも、子どもが自分からドアを開けてくれるのは、「話を聴いてほしい」と思ったときでした。うまくいかないこともある。しんどくていい。消えたいと思う日があっても、何もできない日があっても、ダメじゃない。全然ダメじゃないよ。そんな気持ちで耳を傾けていると、少しずつ子どもの方からドアを開けてくれるようになりました。思春期は、口は1割、耳は9割がちょうどいいですね。

